



退任なさる先生からのメッセージ

教師として四十八年を生きる

堀内 一男

公立中学校の社会科教師として二十年、教育委員会の指導主事等として教育指導行政に従事して十二年、学校長として学校経営に関わって四年、跡見学園女子大学で教職課程に携わって十二年、今四十八年の教師生活を閉じようとしている。

終戦の年の四月、次に又起こるであろう東京大空襲を逃れて富山県の母の実家に疎開し国民学校に入学してから、貧しくはあったが戦後の民主教育の進展の中で育ち、学んだ。この間に出会った若いエネルギーな教師達に憧れ、刺激され教師を目指し、昭和三十六年、第一次ベビーブームの子どもたちを担任する中学校の教師として採用された。当時は「15の春を泣かせるな」という「受験戦争時代」であり、その後、その時代の反省から「ゆとりある充実した教育のあり方」を求め実践し続けてきたが、今日に至るまでまさに戦後の教育史そのものを教師として過ごして来たといっても過言ではあるまい。

多くの公立小・中・高等学校の教師は二十歳代の前半に採用されて、三十数年にわたる教師生活を過ごす。私はその先に、それまでの経験を生かしながら跡見学園女子大学で「やる気のある、自分をしっかり見つめながら子ども

もたちに寄り添って生きることのできる教師の育成」に関わらせて頂いた。努力して取得した「教育職員免許状」が教師という職業に結び付きにくかった教員採用氷河期から脱却して、大量採用時代に移ろうとしている今、定年退職を迎えることに残念さが無いとはいえないが、新しい時代・新しい教育を子どもたちと共に生きてきた後輩達に「変化の時代を担う教師の育成」を委ねるのが自然の理であろう。

現在の学校は、戦後教育の中で一番の「多くの仕事に追いかかれ、ゆとりの無い時代」といっても良いのではないだろうか。どんな時代であっても、公教育に対する国民や社会からの要望・要請があるのが当然で、その要望・要請を真正面から受け止め、子どもたちにとって過ごしやすい、楽しい学校創りに邁進するのがプロとしての教師の願望であり、誇りであった。しかし昨今では、家庭や地域社会での指導が機能しなくなった。あらゆる「教育課題」「社会の矛盾」への指導・解決が次々と学校教育に委ねられ、教員定数がほとんど増員されていない中で解決が迫られ、もがいているのだ。一つの課題が解決しないうちに次の課題が提示され、スムーズに進まない部分がマスコミの一方的なバッシングにあうという「教師受難の時代」といってもよいだろう。

今、学校は何をしなければならないのだろうか。どんな方向を目指して教育活動を進めていかなければならないのだろうか。私自身が跡見学園女子大学で「教職課程」に関わらせていただくにあたり、努力してきたことは何であったのか、これから「育てたい教師像」にもふれながら考えてみたい。

一 「子どもたち」を育てる ――学校に、地域に子どもたちの居場所をつくり、鍛える必要――

現在、小学校が平成二三年、中学校が平成二四年から完全実施される「新学習指導要領」が告示され、全国の小中学校ではその準備に追われている。この法的規制を伴う「学習指導要領」の作成に当たっては、子どもたちの

「学力向上」に関する分析と学習内容・方法・授業時数についての改善は検討されたが、現在の子どもたちの多くががき苦しんでいる心のストレスをどう受け止め、学習指導上どのように配慮したら良いのかの分析と対策についての検討は、ほとんどなされなかったといってもよいだろう。

平成十七年七月、麻布台学校教育研究所では、筆者が委員長となり「子どもたちの心の中を探る」をテーマにした調査内容を発表した。次のような衝撃的な結果を得た。

(小学校5年生、中学校2年生男女千二百名の調査。一部抜粋)

自分は、人に好かれていない	——	(小5)	男59%	女59%	(中2)	男80%	女76%
自分は、勉強嫌いだ	——	(小5)	男65%	女62%	(中2)	男88%	女86%
私はクラスで役立っていない	——	(小5)	男63%	女53%	(中2)	男78%	女79%
私は嫌われていないか心配	——	(小5)	男43%	女73%	(中2)	男39%	女60%
私は自分が嫌い	——	(小5)	男23%	女31%	(中2)	男50%	女63%
生まれてきて良かった	——	(小5)	男94%	女91%	(中2)	男85%	女87%
生まれてきて良かったと思わない理由…友達がいらない。勉強が嫌い。家がつまらない。							

ここでは、自分に自信が持てず、常に周りの友人の表情や反応を気にしながら、思い切り行動することができない子どもたちが浮き彫りにされた。特に中学生になると、駄目な自分を過剰に意識して、自尊心に欠ける「自分嫌いの子ども」が半数を超える実態が明らかにされた。

子どもたちが自分の良さや持ち味に気づき、クラスや集団の中での自己有用感や自己肯定感を持ち、元気な毎日

を過ごさせるために、学校や教師には何かできるのだろうか。

「ものごとに興味・関心をもつ」「友人と楽しく交わり、汗をかいて遊ぶ」「辛くても我慢してチャレンジする」「相手の心を感じ取る」……これらは、乳幼児からの家庭教育が基盤になって育つ資質とはいえ、学校という集団の中で関わりや交わりを意図的に創りだし、学校生活の中に一人一人の施設上での心地良い場所や心の居場所をつくり、鍛えていく必要がある。各教科の授業での関わり、体育大会や合唱コンクールなどの学校行事での交わり、ボランティア活動を通した思いやり、部活動での切磋琢磨などにより、子ども同士の関わりを促し、個人や学級、学年集団を厳しく鍛え高める工夫と努力を積み上げなければならない。

「厳しく鍛える」というと、「子どもの人権は」とか「子どもが傷つく」との異論が出てきそうであるが、「駄目なことは駄目」「必要なことは理屈抜きで身に付けさせる」ことが、家庭や地域社会で指導ができなくなった今こそ、必要なのではないだろうか。子どもの人権の尊重という名の下に、甘やかしやなまぬるい対応が当たり前になってしまった今、「学校は学校、街中とは違うんだ」という姿勢を正さなければならない時期に来ていると思う。「鍛える」ことは、何か、特別なことを新たに進めるのではなく、全教職員の意思の疎通を図り、毎日の教育活動のねらいを全ての子どもたちに徹底することに、教師自身がチャレンジすることである。親も世間も「子どもの心を傷つけないよう配慮した指導」を望むのが当然であるが、そのことが子どもの成長にとって必要か否かの判断こそ教師の姿勢として一番大切なことではないだろうか。

「努力の足りない自分」を友人との意図的な関わりの中で見つめさせ、「努力できる自分」に気付いたとき「意欲的な学びの姿勢」が芽生えるものと信ずる。どんな素晴らしい学習内容や方法も、この「努力できる自分」の発見なしには実を結ばないのではないだろうか。

二 「若い教師」を育てる——〈教師としてのライフステージを自覚できる教師の育成〉

私自身が中学校教育や指導行政に関わった三十数年を振り返ってみると、部活動（陸上競技部・演劇部を校長時代まで継続していた）や学級経営に夢中になり、教師としての在り方、子ども達との関わり方を試行錯誤しながら模索した「新規採用とそれに続く時代」、教師という職業の面白さに取りつかれて自分自身の持ち味を生かしながら様々な教育活動にチャレンジ心を燃えたぎらせた「中堅教師として学校全体を見つめはじめた時代」、学年主任などの責任あるポストに就いて「学校経営への参画・協力を目指した時代」、学校長として学校の特色や校風を大切にして継承しながら、生徒や保護者の信頼を得るとともに、「地域社会との絆を深く結ぶことを大切にした学校経営時代」……など、幾つかのステージに分けることができる。

自分自身の授業力の向上についても、「先輩教師から謙虚に学び、目当てをもって研究会に参加し、授業力を鍛えた時代」「教科などの専門性を高め、多くの人に授業を参観していただき、実践的な授業力に磨きをかけた時代」「鍛えた授業力を生かし、校内研修のリーダーとなって、若手教員を伸ばすための方策を計画した時代」「自らの資質・能力を高め、区市や都、全国の研究会をまとめ、活動を活性化させた時代」などに大きく分けることができる。

若い教師の育成に関わる者として、この様々なライフステージと結びついた教師の力量形成と向上に全力投球することが必要となってくる。まして、ここ二・三年後にやってくる「団塊世代の教員の大量退職、若い教師の大量採用時代」を迎えるに当たっては、このことが学校経営上の最大の課題となってくることを受け止める必要がある。

若い教師の育成のためにまず重要なことは、「教師にはライフステージに対応した役割や立場があることを自覚させること」である。教師に必要な資質、専門性、能力、技能、心情や人間性などの力量形成と向上への研修は、自己研修や校内研修を基盤に、各ステージに応じた短期や長期の研修の場や機会があることを教える必要がある。

職場を離れて、一年や二年の長期研修の参加を望んでも職場の状況や校務分掌を考えて遠慮し、踏み切れない教師には、先輩たちが研修できる環境をつくり後押しすることも大切である。このような職場の雰囲気があると、誰かがどこかで自分の仕事を正しく見つけ評価してくれていることを知り、自分自身の仕事に対するやる気が高まると同時に、職場全体のモチベーションが醸成されるからである。

かつて、管理職試験の面接の場で、「あなたは校長として一番大切なことは何だと思いますか」と問われたことがあった。私は暫く考えたあと「職場全体が仲良くなることです」と答えたが、面接官の間に失笑が漏れたことを覚えている。仲良くなることで「仕事上の成果」が必ず高まるとは思わないが、一人一人の教師が考えていることや意欲を感じ取り、努力の方向性を示してあげること、自分自身が大切にされていることを感じ取り、それが職場の雰囲気となっていくと考えられないだろうか。若い教師が一気に増えるこれからの時代に、自分自身の持ち味と組織の一員として経験年数によって生じてくる役割があることの自覚を持たせることの大切さを意識させたい。

私の四十八年間の教師生活のうち、最後の十二年間を跡見学園女子大学で楽しく過ごさせて頂いた。最近では専門分野をもって生涯の研究テーマを追究されているお一人お一人の先生方の研究姿勢を理解できるようになってきたが、「学問への道」への憧れを抱くとともに、自分自身には学問の道は向いておらず、より良い子ども・教師・教育の世界を創るために身体を動かし、走り回り、今具体的にどうすれば良いかを教師や保護者の方々と共に考えることこそ天命なのかとも思うようになった。しかし、そのことも「跡見学園女子大学教授」という看板が多くの仕事をさせていたかく原動力であり、自分自身はその後を必死に追いかけていることにも気付き始めた。今後、看板を外し、どう一人歩きをするかが私の課題となるであろう。

いろいろとお世話になりました。ありがとうございます。

堀内一男（ほりうちかずお）



生年月日（出生地）

一九三九年二月二八日 東京生まれ

学歴

一九六一年三月 東京学芸大学初等教育学科社会科（地理学専攻）卒業
一九六五年三月 立正大学文学部地理学科二部卒業
一九七八年三月 駒沢大学大学院人文科学研究学科地理学専攻修了

職歴

一九六一年六月 東京都品川区立荏原第三中学校教諭
一九六七年四月 東京都新宿区立四谷第二中学校教諭
一九七三年十月 国立東京学芸大学附属世田谷中学校教官
一九八一年四月 東京都世田谷区教育委員会指導主事
一九八四年四月 東京都立教育研究所調査普及室指導主事
一九八六年四月 東京都教育庁指導部指導主事・主任指導主事
一九九一年四月 東京都教育庁指導部中学校教育指導課長
一九九三年四月 東京都中央区立銀座中学校長
一九九七年四月 跡見学園女子大学文学部教授

（この間、二〇〇三年から東京家政大学文学部非常勤講師）

編著

「学校の中での環境教育」（一九九二年八月 国土社）
「国際理解教育の進め方」（一九九四年三月 教育出版）
「選択教科の新展開」（一九九九年八月 明治図書）
「中学校新学習指導要領の展開―社会科」（二〇〇八年十二月 明治図書）
「中学校教育課程講座―社会」（二〇〇九年一月 きょうせい）
「現代学校経営シリーズ」（27、29、31、33、37、39、41、43巻）
（二〇〇一年から二〇〇九年 東京書籍・東京教育研究所）

主な論文

「国際化に見合う学校作りのあり方」（一九九四年九月「国際理解教育と教育実践第12巻」エムティ出版）

「学校の創意工夫を生かすための校長の役割」(一九九九年二月
「新しい教育課程と学校づくり」ぎょうせい)

「必修教科等との関連を図った選択教科の在り方」(二〇〇〇年二月
「中等教育資料」文部科学省)

「総合的な学習の時間を指導する教師に必要な力量形成」(二〇〇〇
年二月「研究報告書NO.一九三」(東京教育研究所)

「社会科における新しい評価の在り方と評価方法の改善」(二〇〇
二年五月「中等教育資料」文部科学省)

「今、子どもたちの心の中では」(二〇〇五年七月「紀要二二号」
麻布台学校教育研究所)

「学校を元気にするために」(二〇〇六年五月「研究報告書NO.二
一〇」東京教育研究所)

「総合的な学習と各教科等との関連」社会科の場合」(二〇〇九年
四月「総合的な学習の実践事例と解説」第一法規)

社会における活動

・文部科学省 平成十年版 中学校学習指導要領 社会 作成協
力者(副主査)

平成二十年版 中学校学習指導要領 社会 作成協力者(主
査)

・文科省・環境省「環境保全・環境教育の推進に関する基本方針
に向けた懇談会」委員(二〇〇四年)

・東京都教育委員会「小・中学校の適正規模に関する調査会」副
委員長(二〇〇六年)

・新座市教育委員会「新座市社会教育委員」(二〇〇〇年～現在)

「新座市学校評価システム構築事業運営委員会」委員長(二〇
〇五年～現在)

「新座市野火止用水景観保存審議会」委員長(二〇〇六年～現
在)

「新座市次世代育成支援対策地域協議会」副委員長(二〇〇五
年～現在)

・江戸川区教育委員会「江戸川区教育プラン会議」副委員長(二
〇〇七年～現在)

・学校評議委員・学校外部評価委員・学校運営委員会委員等
——現在委員長・委員継続中学校五校(「品川区立荏原第三
中学校」「中央区立銀座中学校」「杉並区立高南中学校」「世
田谷区立弦巻中学校」「新座市立第四中学校」)

・経済同友会「学校と企業・経営者の交流活動推進委員会」委員
(二〇〇四年～現在)

・その他 東京都・埼玉県を中心とした教育委員会・小中学校に
おける学校経営、授業力向上等の校内研修・研究校への指
導・助言、講演会等多数